

故・竹田耕三氏を偲んで

現代に生き続ける 伝統の有松絞り

夏真っ盛り。浴衣姿が一層涼しげに感じられる季節です。今回は、有松の藍染め・絞り作家で昨年11月に惜しまれながらこの世を去った竹田耕三氏の功績を紹介します。美意識の高い作家として作品を生み出す一方で、古い有松絞りの技術を後世に残そうと尽力しました。



面倒見がよく、人望があった竹田耕三氏。葬儀では学生たちが泣き伏し、早すぎる死を悼みました

新町開拓のリーダーであり有松絞りの開祖 竹田庄九郎の血筋

昨年11月、胆管がんのため67歳で亡くなった竹田耕三さん。緑区有松の藍染め・絞り作家で、江戸時代に有松絞りを始めた竹田庄九郎の子孫にあたります。本家からのれん分けをして続いていた血筋は、耕三氏の兄であり竹田嘉兵衛商店の社長、竹田浩己さんで八代目です。

有松は、江戸時代初期である1608年に、桶狭間村の支郷づくりを尾張藩が奨励したために生まれた新町。開拓のリーダーを担った竹田庄九郎は、その土地が農作に適していないことを見極め、農業以外の生計を模索しました。そこで絞りに着目したことが、有松絞りの始まりです。最初は木綿絞りに藍で手ぬぐいや馬の手綱を染めて、東海道の通行人への土産として販売されました。当初は有松内での販売でし

たが、鳴海の宿に出張販売したことから「鳴海絞り」とも呼ばれ、大流行。絞りの繁栄とともに、江戸後期の有松には豪壮な町屋建築の町並みができあがっていました。古き良きものに価値を見出す有松が育んだ美意識と職人氣質

江戸時代にタイムスリップしたかのような地で、三人兄弟の末子として生まれ育った耕三氏。絞りを抱えて歩く人や、職人が行き交う有松の環境は、自然と美意識を育みました。兄の浩己さんは、絞りの着物や小物を販売する竹田嘉兵衛商店の社長を、姉の中村倅子さんは顧問を務め、運営を担当。耕三氏が製作面を担ってきました。



左) 耕三氏について、「お酒が好きで無口。まるで広報担当のように、有松絞りが世に出るきっかけを作った人でした」と話す妻の竹田幸生さん 右) 和服姿が似合う竹田耕三氏の姉・中村倅子さん。「染色の世界に少しでも貢献できれば、弟は喜ぶと思います」と話します

ですが、昔ながらの方法にこだわりました。徳島県の藍師や、他の絞り職人も協力し、数々の作品を生み出しました。倅子さんは「絞りにかけては、兄も私も彼にかないませんでした」と話します。深い藍の中に鮮やかに白地を散らした「吹雪文様」や、藍と白地のコントラストが印象的な「雪花」など、藍の美しさに改めて気づかされるような作品を残しています。

うことに危機感を持ちます。木綿の浴衣が主である有松絞りは、着古すと布切れにして再利用されたため、古いものはあまり残らなかったのです。模様によりそれぞれ職人が違うため、職人がいなくなると、再現が難しくなる技法も少なくありません。師と仰いだ絞り作家の故・片野元彦氏に、「今のうちに古い絞りを集めておくべきだ」と助言されたこともあり、収集に乗り出しました。

「私たちの父は、全国に先駆けて有松の町並み保存運動を起こしました。弟はその生き方に習い、自分も世のために、有松と有松絞りのために尽くして生きたいと願っていたようです」と中村さん。

昔の有松絞りの柄は、今見ても古びていないことはもちろん、想像以上にモダンで凝ったものが多いことに驚かされます。「昔のもののほうが斬新かもしれませんね」と幸生さん。これらの貴重な資料を見学し、



耕三氏の作品を代表する、「吹雪文様」の振袖。有松絞りのファッションショーにも出展されました

「私たちの父は、全国に先駆けて有松の町並み保存運動を起こしました。弟はその生き方に習い、自分も世のために、有松と有松絞りのために尽くして生きたいと願っていたようです」と中村さん。

昔の有松絞りの柄は、今見ても古びていないことはもちろん、想像以上にモダンで凝ったものが多いことに驚かされます。「昔のもののほうが斬新かもしれませんね」と幸生さん。これらの貴重な資料を見学し、



shop data
竹田嘉兵衛商店
●名古屋市長区有松1802
●052-623-2511(代)
●9:00~17:00
<http://www.takeda-kahei.co.jp/>

Column

有松の町並み保存地区内にある竹田家住宅は、町屋建築を残した旧東海道を代表する建物の一つ。名古屋指定有形文化財に指定されています。主屋は1階が連子格子、2階は虫籠窓のある黒漆喰の塗籠造。江戸時代前期に生まれたといわれる棧瓦葺の屋根も特徴。ひさしには明治期のガス燈が残り、当時の商家の繁栄ぶりを残しています。分家独立した竹田家の屋号「笹加」の看板や主屋とともに古き良き景観を形成している切妻造りの屋根を持つ土蔵、黒漆喰塗の外壁も美しい造りです。



耕三氏が収集した作品の一部



千鳥の浴衣
江戸時代後期(1800年代)のものである。「千鳥製斗文様」の浴衣。「折り縫い紙巻き三浦絞り」の技法が用いられています



蓑浴衣
大正時代(1920年代)のものである。「蓑」の浴衣。江戸期の浮世絵などに多く見られる絞り柄ですが、現在にその技術が伝えられていないもの一つだとい



蓑鎧段とホオズキ 蜘蛛追東風
「蓑鎧段とホオズキ 蜘蛛追東風」と名付けられた浴衣。明治時代(1890年代)のものとしています



蓑に鉄砲浴衣
「蓑に鉄砲」と名付けられた。江戸時代後期(1800年代)の浴衣。鉄砲玉が飛ぶときの火花を表現しています